

常に前進しながら人と環境にやさしい製品開発

今や、クルマは日常生活にあって当たり前のもの。それゆえ、自動運転のような先進的な技術開発とあわせて運転時の操作性といった日常的な課題解決を行う必要があります。これらの取組みについて、東海理化レポート2017ではさまざまな部分から読みとることができました。自動運転については、人とクルマが一体化したような心地よさを感じさせる『フューチャーコックピット』(特集1)を通じて、多くのステークホルダーに近未来における自動運転のイメージを伝える様子が報告されています。運転時の操作性については、『シフトレバー』などの製品の快適性の追求が挙げられます。これらは、安全・安心だけではなく、人に寄り添った製品を展開されている東海理化ならではの取組みだと思います。

また環境報告では、製品の開発段階から、環境への配慮を怠らない姿勢が貫かれています。具体的には、『タッチパッド』などの軽量化による燃費性能の向上や、『エンブレム』の素材の材料変更による環境負荷の低減が挙げられます。



充実した職場環境と多岐にわたる社会活動

社会性の報告についても、例えば『職場づくり』の点からは、社員の『年次有給休暇の取得率』が高いことや、『育児・介護』制度を積極的に利用できる環境が整えられていることなどがわかります。『社員の女性比率』は自動車業界でも高い水準にあり、女性の感性や能力を事業に活かしていることは、ダイバーシティの観点から高く評価されると感じました。加えて、障がい者の方や子どもたちとの触れ合いなど、地域社会への

貢献や、『チャリティー・ヘルシーメニュー』による寄付を通じた国際貢献から、多岐に渡って社会と繋がり、共生していきたいというメッセージが伝わります。今後、さらなるKPI(重要業績評価指数)の設定や管理を含めて社会性の活動がますます充実することを期待しています。

“人に触れる・人と触れあう”というコンセプトの追求

報告書を通して思ったことは、東海理化の製品開発や社会・環境活動から強く感じた、“人に触れる・人と触れあう”という部分を図説・数値化するなどして、さらに具体化して表現できないかということです。『タッチパッド』や『ハンドル(ステアリングホイール)』に触れた時の感覚や感動は確かに存在します。また、環境保全活動だけではなく、働きやすい職場環境や幅広い社会活動における人との触れ合いも数多くあるかと思います。難しい注文ですが、触れる・触れあうといった感覚をより伝わりやすい形で視覚化できれば、東海理化の魅力がさらに深くステークホルダーに伝わるのではないのでしょうか。

最後に、2017年版ではじめて非財務の報告にあわせて財務情報を報告されたことは、統合レポートとしての第一歩であり、今後、社会・環境活動と事業との関わりをさらに深く掘り下げながら、活動および報告を継続されることを期待しています。



愛知淑徳大学 人間情報学部
高原 美和 准教授

愛知淑徳大学人間情報学部准教授。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了後、株式会社豊田中央研究所客員研究員、愛知淑徳大学人間情報学部講師などを経て、2016年4月より現職。博士(人間科学)。認知機能の加齢変化に関する研究や、高齢ドライバーの運転行動を分析し背景要因を検証する研究を行っている。

第三者意見を受けて

当社は人とクルマをつなぐ、人にやさしい製品づくりをテーマに長年取組んでまいりました。この分野に造詣が深い高原先生から、この取組みに対し、評価をいただいたことに感謝申し上げます。

自動車業界は今、正に変革の時を迎えており、自動運転や高度運転支援、電動化など、従来の枠組みにとらわれない競争が行われようとしています。その中でも当社は人を想い、人に寄り添うことを製品づくりの要とし、これからより良い製品を提供することで社会に貢献してまいります。

本年度の報告書は、従来からの環境活動、社会活動に加えて、事業活動としての財務情報を含めたものとし、名称も「東海理化レポート」といたしました。高原先生からもご指摘いただきましたように、今後さらに内容の充実を図り、当社のさまざまな取組みをステークホルダーの皆様にも判りやすくお伝えすることで、より信頼とご期待をいただけるよう努めてまいります。



取締役
総務部・人事部・人材開発部
総合企画部・経理部 統括
林 清宗